

『峯相記』と『走湯山縁起』と 『宮根山縁起』と神功皇后

金 光 哲

第一章 『峯相記』

- (1) 鶏足寺の開山譚と神功皇后
- (2) 神功皇后の「大將軍・副將軍」
- (3) 新羅「瀬戸内」攻撃説

第二章 『走湯山縁起』

- (1) 一円鏡の出現と神功皇后
- (2) 八幡神の飛来と道鏡

第三章 『宮根山縁起』と高麗神社

キーワード：神功皇后譚、新羅日本攻撃説、
『峯相記』、『走湯山縁起』、『宮根
山縁起』

第一章 『峯相記』

(1) 鶏足寺の開山譚と神功皇后

播磨国の地誌『峯相記』は、正安～乾元年間（一二九九～一三〇二）の悪党、異類異形を活写して著名である。後醍醐天皇関係の記事から考えて、成立は南北朝初期⁽¹⁾とされる。

兵庫県太子町斑鳩寺本は、奥書に、

永正八天（一五一一）^{辛未}二月七日、於_二書
写山別院定願寺、以_二岡元坊本_一如_レ形写_レ
之畢。

とあって、もっとも古い写本である。本稿は、

この斑鳩寺本⁽²⁾と続群書類従本⁽³⁾を使用する。

『峯相記』は、「貞和四年（一三四八）十月十八日、播州峯相山鶏足寺参詣ス」で始まる。峰相山は、姫路市の書写山の西にある。鶏足寺は、『扶桑略記』（国史大系）第二十六、康保四年（一一〇二）五月、同代条に、

播磨国揖^(保)_二東郡^(相)峰相山鶏足寺有_二一切経_一。数年披閱、
若有_二難義_一者、夢有_二金人_一常教_レ之。

とあって、平安時代の存在を確認できる。

宝暦十二年（一七六二）自序の『播磨鑑⁽⁴⁾』
揖東郡、「峰相山鶏足寺」に、

揖東郡大市郷峰相山鶏足寺者、及_二天正年
中_一六七坊猶残。有_レ故、大市郷民一党而堂
社仏閣悉焼失。

と、天正年間に「郷民一党」、つまり蜂起によっ
て「焼失」したとある。また、

峰相山焼失之事。劔持翁聞書曰、羽柴家ニ
叛キ、天正六年（一五七八）八月十日、大
市ノ郷民ニ仰セ、小寺氏ノ下知トシテ破却
ス。傘ニ火ヲカケ坊舎ヲ焼ク。

とする秀吉による「破却」説もある。

文化元年（一八〇四）刊行の『播州名所巡覧
図会⁽⁵⁾』四、峯相山鶏足寺蹟に、「打こし村よ
り下伊勢村へ越ゆる所の嶺、石鞍⁽⁶⁾村に礎多く残

(1)『群書解題』第七巻・釈家部、続群書類従完成会。
(2)魚澄惣五郎『斑鳩寺と峰相記（復刻版）』、白雲堂書
店、一九七九年。これに影印されている。

(3)『続群書類従』巻第二十八輯上、続群書類従完成会。
(4)『覆刻 播磨鑑・摂陽群談』、歴史図書社、一九六九年。
(5)『播州名所巡覧図会』、柳原書店、一九七四年。

れり」とあり、

西播第一の伽藍也。天正の始めには諸堂相残り、塔頭七・八坊ハ在けるに、郷民の蜂起に焼亡す。

とあって、これには「郷民の蜂起」による「焼失」説に立っている。

『峯相記』の叙述方式は、著者と「昔シ知レル」鶏足寺の老僧との問答形式をとる。「抑モ、当山ハ建立以後、星霜幾程ヲ経テ候ゾヤ」とする鶏足寺の起源についての問いに、老僧は、

答云。当寺ノ起リ遠キ哉。神功皇后、三韓ヲ攻メ給シ時、新羅国ノ質子・王子ヲ取り歸リ給ヘリ。

と、神功皇后が三韓を攻めたとき、「新羅国王子」を人質として連行した、と返答する。

この「新羅国ノ質子・王子」が、

王子云、「渡海ノ間、風破ノ難ナク日域ニ付カセ給バ、一ノ伽藍ヲ建立セン」ト。

と、「一ノ伽藍」建立を発心した。

一方、神功皇后は、

皇后、仏法ノ是非ヲ知給ネバ、分明ノ勅答ナカリキ。筑紫ニテ皇子降誕ノ後、飯洛ノ時、尚西戎ヲ恐れ給フ故ニ、副將軍・男貴尊ヲ当国ニ留メ置給シニ、彼王子ヲ領ケ奉ラル。

と、「西戎」を警戒し、「副將軍・男貴尊」に「新羅国ノ王子」をあずけた、とする。

そこで、新羅国王子は、

王子、当山ニ^(磐)拳チ登リ、草庵ヲ結テ、一心ニ千手陀羅尼ヲ誦シ給フ。数百年ヲ経給ヘリ。

と、峰相山によじ登り「草庵」を建てた。そして、数百年が経過し、「敏達天皇ノ御字十年」に「一堂ヲ建立」し、王子は「入滅」したとす

る。これが鶏足寺の「起り」とする。

(2) 神功皇后の「大將軍・副將軍」

鶏足寺の開山譚には、神功皇后の三韓征伐と関連して「副將軍・男貴尊」が登場するが、この神功皇后の「大將軍・副將軍」に注目すると、『峯相記』には、

乍^(六)去、一宮・伊和大明神者、完栗郡伊和郷ニ坐ス。素盞男ノ尊ノ第一ノ皇子・大己貴尊、白山妙理権現ト顯坐ス。爰ニ神功皇后三韓ヲセメ給シ時、副將軍トシテ彼ノ戦場ニ向ヒ坐ス。

とする「副將軍・伊和神=大己貴尊」の記事がある。

静謐ノ後、皇后飯洛ノ時、尚異賊勝ニ乗ル事アラバ、中国ノ諸神ヲ相催テ責戦ベキ由、御約諾ヲ蒙リ、神勅ニ隨テ、当国神戸地ハ四方山ヲ廻テ、河ノ流レノ谷ノ口無雙ノ要害タル間、此ニ^(陣)陳ヲ取テ後、薨卒ノ跡ヲ顯シ坐ス。

と、神功皇后が三韓征伐から帰洛後、「異賊、勝ニ乗ル事」ある時に備え、穴栗郡伊和郷（一宮町伊和）に陣を構えた。「大己貴尊」はこの地に留まり、その後、他界した、とする。

神功皇后の「大將軍・副將軍」創出は、なにも『峯相記』の独創ではない。この主張は、すでに平安時代に存在した。鎌倉期の顕昭の『袖中抄⁽⁶⁾』に、

又、神功皇后伐^(七)新羅^(七)給之時、住吉は大將軍、日吉は副將軍。……江記に侍り。

とあって、大江匡房（一〇四一～一一一一）の「江記」佚文に言及している。

文治四年（一一八八）には成立の片仮名古活字三卷本『康頼宝物集⁽⁷⁾』中に、

(6) 久曾神昇編『日本歌学大系』別巻二（風間書房、一九八三年）、一四六頁。

(7) 『統群書類従』卷第三十二輯下。成立は、新日本古典文学大系『宝物集・閑居友・比良山人霊託』の解説による。

神功皇后ノ（新羅国）責給ケル時、安部氏ヲ以テ將軍トセリ。其故ニ安部ノ氏長者ヲ召テ、大嘗会ノ度ニ吉^(志)悉舞ヲ仰ラル。今ニ断事ナシ。

とあるように、「安部氏將軍説」が院政期から鎌倉期の移行期にすでにあった。

『宝物集』は、一卷本 → 片仮名古活字三巻本 → 七巻本 と増幅するが、第二種七巻『宝物集⁽⁸⁾』には、「安部の氏をもて大將軍とせり」とある。

鎌倉期の『平家物語⁽⁹⁾』巻十一、「志度合戦」に、

むかし神功皇后、新羅を攻め給ひし時、伊勢大神宮より二神のあらみさきをさしそへさせ給ひけり。二神御舟のともへに立って、新羅をやすく攻め落されぬ。帰朝の後、一神は摂津国住吉のこほりにとゞまり給ふ。住吉の大明神の御事也。いま一神は信濃国諏防のこほりに跡を垂る。諏防の大明神是也。

とある。

鎌倉初期には発生した「新神功皇后譚」を石清水八幡宮で集大成した『八幡愚童訓⁽¹⁰⁾』甲は、正安二年（一三〇〇）頃の成立とされるが、これに、

諏訪・熱田・三嶋・宗像・巖島明神達、都合三百七十五人、志賀ノ嶋ヨリ四十八艘ノ御船ニ乗給。……此内梶取ニハ志賀嶋大明神、大將軍ニハ住吉大明神、副將軍ニハ高良大明神也。（一七五頁）

と、大將軍を住吉神、副將軍を高良神とする。

南北朝期の『太平記⁽¹¹⁾』巻三十九、「神功皇后攻新羅給事」に、

諏防・住吉大明神ヲ則副將軍・裨將軍トシテ、自餘ノ大小ノ神紙、樓船三千餘ヲ漕雙べ、高麗国へ寄給フ。

とある。

これらの歴史思想の蓄積が、『峯相記』の神功皇后の「副將軍」造作の歴史的背景にあった。

(3) 新羅「瀬戸内」攻撃説

天平宝字七年（七六三）に、

大炊天皇（淳仁天皇）御宇、天平宝字七年ニ、当揖保ノ郡布施ノ郷ニ、五足ノ犢子ヲ生ズ。子細ヲ奏ス。

とする独自の記事があり、「異賊責来テ大兵乱ノ由シ占ヒ申」したとする。つづいて、

翌年、新羅ノ軍船二万餘艘、当国マデ責入テ家嶋・高嶋ニ陳^(陣)ヲ取ル。朝家驚テ藤原貞国ニ的ノ姓ヲ給リ、鉄的ヲ討通ス將軍ノ宣下ヲナサル。近国ノ官兵ヲ駈テ、異賊ヲ追討スベシ。当国ノ正税ヲ調伏壇所ノ供料兵糧米ニ募ベシト云々。

とする新羅軍船の瀬戸内海の「家島」攻撃譚を造作し、藤原貞国なる人物を創作した。

将貞国ヲ一陳^(陣)トシテ、官兵魚吹津ヨリ出デテ発向ス。……爰ニ俄ニ大風吹テ、異賊七百三十二艘沈没シ畢ヌ。官軍、彼ノ異賊ノ大将ノ頸ヲ^{かき}昇来テ、高棚ニ上テ守ル。

と、大風により新羅軍船「七百三十二艘」が沈没し、「魚吹津」より出陣の官軍に斬りとられた「大将ノ頸」は、「高棚」にさらされた、とする。

新羅「日本攻撃説」は平安時代から存在⁽¹²⁾したが、新羅「瀬戸内」攻撃説に限定すると、文永十一年（一二七四）から嘉元三年（一三〇五）

(8) 新日本古典文学大系『宝物集・閑居友・比良山人靈託』

(9) 新日本古典文学大系。

(10) 日本思想大系『寺社縁起』

(11) 日本古典文学大系、『太平記』三。

(12) 拙著『中近世における朝鮮観の創出』、校倉書房、一九九九年、三八二～九頁。

に書き継がれた『類聚大補任⁽¹³⁾』の文永四年条に、「第十六代応神天皇。廿三年新羅軍来」、「第三十代欽明天皇。五年新羅来」とあり、「第卅一代敏達天皇」に、「四年新羅軍起。從_レ太宰府_ニ迄_ニ播磨国明石浦_ニ皆焼失」と、「明石浦」を襲撃したとする。

『一代要記⁽¹⁴⁾』の「第三十四女推古天皇」に、「或記云、此御時異国軍、從_レ太宰府_ニ至_ニ播磨国明石浦_ニ」の「或記」は、『類聚大補任』の事かもしれない。

既述の『八幡愚童訓』甲に、

情^{つら}、異国襲来ヲ算レバ、人王第九開化天皇四十八年ニ二十万三千人、仲哀天皇ノ御宇ニ二十万三千人、神功皇后ノ御宇ニ三万八千五百人、応神天皇ノ御宇ニ二十五万人、欽明天皇ノ御宇ニ卅四万余人。

とあり、つづいて、

敏達天皇ノ御宇ニハ播磨ノ国明石浦マデ着ニケリ。其子孫ハ今世ノ屠兒也。……已上十一箇度競来ト云ヘドモ、皆被_レ追帰、多ハ滅亡セリ。(一七〇頁)

とする「明石浦」攻撃説がある。

『八幡愚童訓』甲には、仲哀天皇の時のこととして、「形ハ如_レ鬼神_ノ身ノ色赤ク、頭ハハ」の「塵輪」が、「黒雲ニ乗リ虚空ヲ飛テ」長門国豊浦に着き、「人民ヲ取殺」した。仲哀天皇の射った弓で、「塵輪」の「頸射切ラレテ、頭ト身」の二つになり、仲哀天皇も「流矢」に当たり死ぬとする「塵輪」譚がある。

愛媛県越智郡大三島町の大山祇神社の『伊豫三島縁起⁽¹⁵⁾』は、同社を氏神とする越智一族の縁起で、南北朝期のものであるが、「卅一代敏達天王、……從_レ異国_ニ播磨国明石浦攻寄」とす

る。これに「塵輪云物、長門国豊浦郡渡」とあるように、『八幡愚童訓』甲に影響を受けたものである。

また、室町書記の『豫章記⁽¹⁶⁾』の冒頭、越智氏の分流の「河野系図」の「三並」に、「退_レ治新羅_ノ之時、被_レ遣_ニ大将十人_ニ。其内三番目也」とし、「益躬」に、

異国^{故名、夷} 戎人八千人、以_レ鉄人_ニ為_ニ將襲来_ニ須_ニ終_ニ播磨国明石浦_ニ著。

とあり、『豫章記』本文に、

(鉄人の) 足ノ裏ニ眼有。……抛_レ矢被_レ投ケレバ、跌ヨリ頭迄徹ケルホドニ、馬ノ上ヨリ真倒落。……大将死スレバ士卒皆自殺也。

とし、

残党共ハ^(茫)然、^(迷)逃方モ不_レ知迷ヒケルヲ、……須磨垂水ノアタリ迄、逃延タル夷賊、悉切捨テラル。……少々ハ降ヲ許シ、ヨウロ筋ヲ断テ海辺被_レ放。其子孫海士宿海ト成テ、^{スナドリ}漁捕命ヲ続ケル故ニ、西国ノ海人・河野下人タルベシト被_レ定。

と、須磨垂水まで逃げ延びた夷賊は、河野氏の「宿海」となったとする。

『豫章記』は、「群書類従本」に「委ク愚童訓ニ見エタリ」とあり、「高野山上蔵院本⁽¹⁷⁾」にも「詳ニ愚童訓ニ見タリ」とあり、「鉄人」は『八幡愚童訓』甲の「塵輪」を継承したものである。また、『峯相記』の「鉄的」は、これらの歴史的影響のもとにあり、直接的には『豫章記』の「鉄人」を模倣したものであろう。

(13)『群書類従』第四輯。

(14)『改定 史籍集覧』第一冊、臨川書店。

(15)『続群書類従』第三輯下。

(16)『群書類従』第二十二輯。

(17)『予章記』(伊予史談会双書 第5集)、愛媛県教科図書株式会社、一九九四年。

第二章 『走湯山縁起』

(1) 一円鏡の出現と神功皇后

走湯山とは、静岡県熱海市伊豆山字上野地に鎮座の伊豆山神社を指し、走湯権現、走湯山権現、伊豆権現、伊豆山権現とか称した。伊豆山神社は、東海道線の熱海駅で下車し、海岸沿いを東京よりに引き返し、温泉郷の中央近くの石段を登ると、そこに鎮座している。

後白河天皇の『梁塵秘抄⁽¹⁸⁾』巻第二に、

四方の靈驗所は 伊豆の走湯 信濃の戸隠
駿河の富士の山 伯耆の大山 丹後の成相
とか 土佐の室生戸 讃岐の志度の道場と
こそ聞け (三一〇)

とあって、「伊豆の走湯」はすでにこの時代、山岳宗教の靈驗所として知られていた。

『走湯山縁起⁽¹⁹⁾』巻第二に、「于_レ時弘仁三年^{壬辰}二月十八日。大学寮兼遠江伊豆刺史大江朝臣政文記之」とあり、田中卓氏⁽²⁰⁾はこの「奥書を信じてよい」とする。つまり、弘仁三年(八一二)の成立とするが、西田長男氏⁽²¹⁾は、大江政文について、『三代実録』から弘仁期の大江氏存在を否定し、成立の上限を平安時代末期、下限を鎌倉末期から南北朝初期とした。

『走湯山縁起』巻第一冒頭に、応神天皇二年四月、相模国唐浜・磯部の海浜に、日輪のように光明を放つ「一円鏡」が出現した。近づけば海底に隠没し、また高峯に飛んで登った。そこで時の人は「二處日金」と称した。

応神天皇四年、「一仙童」が口に松葉と茯苓を服すので、「松葉仙」と号し「神鏡(一円鏡)」を奉斎した。仁徳天皇二十七年八月五日、忽然

と「神鏡」が光明を放ち「禁闕(皇居)」を照らした。そこで、武内宿祢が、

(神功皇后)攻_二三韓_一時、高麗国零沛郡之深沙湯有_二一神人_一。與_二皇后_一結_二契約_一謂、
「来_二影于我大日本国_一。覆_二養黎元_一鎮_二護国家_一。加之、吾胤尊可_レ幸_二東征_一」云々。以_二其厚契_一降_二臨此州_一歟耳。

と「奏聞」した。

つまり、神功皇后が三韓を攻めた時、高麗国深沙湯の「一神人」が神功皇后に、日本に來影し国家を鎮護すると「厚契」した、とする荒唐無稽な物語を造作した。

そこで、天皇は勅使を送り、「松葉仙」にその子細を尋問したところ「卜占」を勧めた。雇った「一老巫」の託宣に、「吾是異域神人也。又是日輪之精軀也」とし、

① 昔、「西天之月^{がつが}蓋」が「釈迦文仏之勅」によって、「閻浮檀金」で「如来真像」を铸造した。神人がこの「金像」を尊重し、「高天原」から「月氏之鏡」にくだり、温泉を化出し蒼生を済度した。如来の「化縁」が尽き、「東漸之幸」を催し、これに随って東向し、神人は「三韓之國」に棲宿した。

② 「神后(神功皇后)」が「討_二三韓_一時」、「卜宅深沙湯」のもとに行き、「今、以_二神威_一伏_二三国_一」した。「大養徳国(日本)」を「本首」とし、「三韓」を「辺哇」とするために、高麗の「湯神客(一神人)」は「本朝」に來達し、「所_二歸依_一金像」を「可_レ迎_二接我朝_一」とする神功皇后の誘いで、「異域神人」が日本に降臨した、とする。

(18)新日本古典文学大系『梁塵秘抄・閑吟集・狂言歌謡』。

(19)『群書類従』第二輯。

(20)田中卓著作集7『住吉大社神代記の研究』、国書刊

行会、一九八五年、二六七頁。

(21)西田長男「諸社縁起叢考」(『ぐんしよ』第七号、統群書類従完成会、一九六二年、一九～二四頁)。

(2) 八幡神の飛来と道鏡

卷第二に、「高野天皇（孝謙）御宇、天平勝宝年中、八幡大菩薩自_レ宇佐_レ臨幸洛都」とし、
于_レ時、当山震動七箇日、温泉沸出。沈檀風薫。神鏡・神鉾飛還、在_レ本社之所。見聞之人随喜無_レ限。権現託_レ神童云、昔神功皇后與_レ我有_レ深契。然今、其尊子八幡菩薩自_レ本社入_レ洛都。

と、昔神功皇后との「深契」のように、八幡大菩薩も走湯山に飛び来たり、本山より京の都に臨幸した、とする。

称徳女帝は、弓削道鏡に「賞禄」を与えたが、八幡大菩薩は「恨」を抱き、走湯山権現も八幡大菩薩との「芳契」の深さによって、

爰以、^(棄)并_レ国移_レ高麗。……神鏡不_レ還、湯泉無_レ涌。空送_レ四十三年星霜。

と、高麗に帰り、四十三年も戻らなかった。権現を高麗まで迎えに行った「地主明神」は、「美酒」で酩酊し、迎えに行った「素意」を忘れ、高麗で「多年」を送ったとする。

第五に、

神功皇后摂政討_レ三韓之時、於_レ船中示_レ現俗形。従兵不_レ見_レ之。於_レ異国軍兵_レ悉見_レ之。

とある。

ところで、群書類従本⁽²²⁾『八幡愚童訓』甲に、

- ①爰日本皇后御船近_レ唐笠計_レ光、夜々照ケリ。白張着タル老俗現_レ、申_レ合力可_レ申。何ナル人ソト問玉フ時、南閭浮提_レ大地頭ナリト申去ヌ。大勢ニモ不_レ憚。(三九四頁)
- ②皇后御帰朝後、相_レ列高麗寺オキニ、昼_レ海_レ唐笠計光。夜_レ山_レ光ケル。仍_レ奏聞申_レ。

時皇后仰_レ、何様。高麗ニテ合力申ト云。南閭浮提大地頭也_ト名乗。神覚ルト勅詔有。何クニモ日本国内任_レ意_レ垂迹シ玉ヘト、勅定ヲ被_レ下ケレハ、依_レ之今伊豆山所ト御坐伊豆権現是也。(三九八頁)

とする文がある。

西田長男氏⁽²³⁾は、伊豆権現について「当社は箱根権現とともに、東国における唱導・説教僧の溜り場として著名であった」とし、この増補を「伊豆山権現の唱導・説教僧が殊更に増益したもの」と指摘している。

『八幡愚童訓』甲の系統⁽²⁴⁾には、冒頭部分や、文永十一年の対馬・壹岐への蒙古襲来の記事が簡略な「簡略本」系統と「非簡略本」系があり、「簡略本」系に「筑紫本⁽²⁵⁾」と「群書類従本」がある。「筑紫本」の成立は鎌倉末期で、「群書類従本」はそれに添加したもので、成立はそれ以降の南北朝期であろうから、『走湯山縁起』も南北朝期の唱導・説教僧の影響を否定できないであろう。

第三章 『宮根山縁起』と高麗神社

『宮根山縁起』は、神奈川県芦ノ湖の東に駒ヶ岳があり、その南「天下の嶮」箱根山に鎮座する箱根神社の縁起である。

『吾妻鏡』文治四年（一一八八）正月十六日条に、「二品、……被_レ始_二所御精進_一」、また二十日条に、「二品立_レ鎌倉_レ令_レ参_レ詣伊豆・宮根・三嶋社等」とあって、北条政子の「二所詣」の開始を記している。

「二所」については、建久五年正月二十九日

(22)『群書類従』第一輯。

(23)『群書解題』第六卷、西田長男氏の「八幡愚童訓」の解題。

(24)拙稿「『八幡愚童訓』甲の「屠兒」記事をめぐって」、

『部落問題研究所』No.137、部落問題研究所。

(25)筑紫頼定編纂『筑紫本 八幡大菩薩愚童訓』、泰東書道院出版部、一九四二年。

条に、「御台所、為_レ奉_二幣于伊豆・宮根兩権現_一、
令_二進_レ発_二給_一」、二月三日条に「御台所自_二二所_一
令_二還_レ著_二給_一」とあって、伊豆権現と箱根権現の
二つを指すことがわかる。また、十行古活字本
『曾我物語』（日本古典文学大系）では、「二所
大権現」（一九三頁）「二所権現」（三四八頁）と
表記している。

『宮根山縁起⁽²⁶⁾』奥書に「建久二年七月廿五
日 別当行実 南都興福寺住侶信救誌焉」とあ
る行実は、『吾妻鏡』建久四年三月十三日条に
「阿闍梨行実」とあり、また信救は、建久元年
五月三日条、五年十月二十五日条、六年十月十
三日条のそれぞれに「信救得業」とあって、二
人の実在とその年代を確認でき、この縁起は、
建久二年（一一九一）に行実の依頼によって信
救が執筆⁽²⁷⁾したものである。

これに、「神功皇后討_二三韓_一後、有_二武内大臣
奏_一云」として、

奉_二請_二異朝大神_一而、令_二祈_二願天下長安寧_一
矣。即奉_二遷_二百濟明神于日州_一。奉_二遷_二新
羅明神于江州_一。奉_二移_二高麗大神和光于当
州大磯峰_一。因名_二高麗寺_一云々。泰祿山者、
異_二其名_一而同_二其跡_一。

とあるように、「天下安寧」を祈願して、「異朝
大神」百濟明神を宮崎の日向に、新羅明神を近
江の琵琶湖に、高麗大神を神奈川の大磯に遷し、
「高麗寺」と名づけた、とする。

また、「泰祿山」とは箱根山のことで、箱根
権現は大磯の高麗大神と「同_二其跡_一」、つまり
同体であるとする。『吾妻鏡』建久三年八月九
日条に、「高麗寺^{大磯}」とあるが、箱根権現と大
磯の高麗神は同体とする。このように鎌倉初期
に、「神功皇后討_二三韓_一」の際、高麗の神を日

本に遷したとする虚構が主張されていた。

『走湯山縁起』冒頭の「一円鏡」が出現した
のは、「相模国唐浜」であった。菅原孝標の女
（一〇〇八～六〇）の『更級日記⁽²⁸⁾』にも、

もろこしが原といふ所も、砂子のいみじう
白きを二三日ゆく。……「もろこしが原に、
大和撫子しも咲きけむこそ」など、人々を
かしがる。

とある。「唐浜」や「もろこしが原」は、高麗
寺前の海浜のことである。

つまり、伊豆権現も、箱根権現も、大磯の高
麗神も同体であった。この考えは、戦国末期か
ら安土桃山期成立の『北条記⁽²⁹⁾』（一名・小田
原記）や、『相州兵乱記⁽³⁰⁾』の「走湯山参詣之
事」に、

北条殿の分国は、伊豆・相模兩國漸治りぬ。
其外は管領の分国也。其比、氏綱伊豆山へ
御参詣あり。御家老面々皆御供也。当山の
別当般若院は、道中まで迎に参る。扱登山
被_レ成、……其後、別当に被_二仰付_一縁起を
御尋有。

とあり、その「縁起」とは、

当社権現は、往古に高麗国より御舟に被_レ
召、当国へ御渡り有。相模國中郡の高麗寺
山に上らせ給ひぬ。依_レ之、比山を高麗寺
と申なるへし。

とするように、室町期にも伊豆権現は「高麗国
より御舟に被_レ召」れたものと主張されていた。

しかもそれは、鎌倉初期から「神功皇后討_二
三韓_一後、有_二武内大臣奏_一」（『宮根山縁起』）と
されたものであったし、南北朝期の義堂周信の
『空華日用工夫略集』巻一、応安元年（一三六
八）追抄⁽³¹⁾十六日条に、

(26)『群書類従』第二輯。

(27)『群書解題』第六巻・神祇部の西田長男氏の解題。

(28)『更級日記』（新潮日本古典集成）、二二頁。

(29)『統群書類従』第二十一輯上。

(30)『群書類従』第二十一輯。

(31)『空華日用工夫略集』巻一、太洋社、一九三九年、

（功）
筥根山、神宮皇后代、武内大臣者創之。
とあるように、箱根権現が武内宿禰の創始と主張されていた。

ところで、鎌倉の由比ヶ浜から大磯にいたる湘南道路を走り、花水川を渡ると「高麗山」がある。広重の『東海道五十三次』の「平塚宿」に、花水橋から望んだ高麗山が描かれている。高麗山の南麓に高麗神社が鎮座、高麗大権現と称した。高麗寺は、明治元年（一八六八）までともに存在したが、この年の神仏分離で高麗寺を廃し、神社は明治三十年に高来神社と改められた。高麗寺は観音堂に千手観音像が残るだけである。

『続日本紀』靈龜二年（七一六）五月辛卯条に、

以駿河・甲斐・相模・上総・下総・常陸・
下野七国高麗人千七百九十九人遷于武蔵
国置高麗郡焉。

とある。「高麗人千七百九十九人」とは、六六八年滅亡の高句麗からの亡命集団であろう。亡命高句麗人は、本稿と関連の「相模」にも入植している。

『筥根山縁起』に、「奉移高麗大神和光于

当州大磯聳峰。因名高麗寺」とあった「高麗大神和光」とは、『続日本紀』大宝三年（七〇三）四月乙未条に、「從五位下高麗若光賜王姓」とある「若光」を指すのであろう。

「高麗朝臣」姓は、高倉朝臣福信薨伝⁽³²⁾によれば、福信は「武蔵国高麗郡人」で、「勝宝初……、改本姓賜高麗朝臣」とあり、それは天平勝宝二年（七五〇）正月丙辰（二十七日）のことであった。

埼玉県入間郡日高町（武蔵国高麗郡高麗郷）の「高麗神社」は、高麗王若光を祀る。高麗神社「社伝⁽³³⁾」によれば、若光一族は大磯に上陸し、のちに武蔵国高麗郡に移住したとする。しかし、大磯に居住したにしろ、そうでないにしろ、高麗王若光一族は統率者自身を祭神に祀った。

相模の大磯には、高句麗からの亡命者集団が居住した。大磯の亡命集団の崇拝する神が若光であったか、どうかは判断の仕様がいないが、神功皇后に関連するものでないのは確実で、神功との結合は、鎌倉以降、南北朝期にかけての日本社会の歴史思想を反映したものである。

二二～三頁。

(32)『続日本紀』延暦八年（七八九）十月乙酉条。

(33)今井啓一「高麗寺・新羅寺・鶏足寺」（同著『帰化人と社寺』、綜芸舎、一九八三年）一四〇頁。